

# 中国人と日本人における言語表現の違い

方 懋 高 鹏飞

## 0. はじめに

中国と日本は一衣帯水の隣国で、いずれもアジアの国、漢字文化圏の国、儒教文化の国である。両国は二千年にわたる文化交流の歴史があり、お互いに深い影響を及ぼし合ってきたと言われている。しかし、中国と日本は決して同文同種というようなものではなく、文化的にも、歴史的にも、いろいろな違いが見られるのである。両国の言葉について言えば、漢字を共有しているにもかかわらず、中国語は中華民族の言語であり、日本語は大和民族の言語であり、まったく系統の違った言語なのである。

「文は人なり、言葉は民族なり」と言われるように、民族の特質は多かれ少なかれその民族の言葉の中から見つけられると思う。中国人は中国語で育ち、中国語でものを考え、中国語で世界を理解し、中国語を使うことによって中国人らしい中国人になる。逆に日本人と日本語の関係についてもそう言えるのである。

大陸型、牧畜農耕型の文化である中国文化と違って、日本文化は島国海洋型、稲耕型の文化だと言われ、行動様式、思考パターン、マナーやたしなみなど含めて、中日両国の文化の相違がかなり大きいものである。「言は心の声なり」と言われるように、言語心理、言語発想が違えば、言語表現、言語習慣ももちろん違ってくる。そこで、お互いに理解できず、誤解を招いたりすることもよくあるのである。という意味で、ある言語を十分に理解し、上手に使いこなすためにはその言語の背景にある文化や言語心理などを知っておくのが重要なことだと思われる。本文では、中国人と日本人の言語心理や言語習慣を分析しながら、言語表現に見られる中国人と日本人の違いについて考えてみたい。

## 1. 言語構造や発想による違い

まず、言語構造についてだが、同じ漢字を使っているにもかかわらず、中国語と日本語は明らかに言語構造の違った言語である。中国語は英語などと同じく「SVO」(主語 + 述語 + 目的語)構造の言語で、日本語は「SOV」(主語 + 目的語 + 述語)構造の言語

である。「我吃饭」という中国語を日本語に訳すと「私はご飯を食べる」となる。中国語にとっては主語は不可欠な成分であるが、日本語にとっては、必ずしもそうではないようだ。「こんにちは」、「お元気ですか」、「よろしくお願いします」、「ただいま」、「お帰りなさい」、「いただきます」など、日本語によく使われるこれらの挨拶用語には、ほとんど主語という成分が使われていないが、中国語に翻訳するとその違いがすぐ分かる。

「你好」、「你身体好吗」、「(我)请你多多关照」、「我回来了」、「我(不客气地)吃了」など、中国語の場合は、いずれも主語を使わなければならないし、あるいは、主語を使ってもよさそうな表現になってしまう。そこで、日本語にとっては「主語無用論」や「主語廃止論」を鼓吹した日本人の学者も出てくるのも何もおかしいことではなからう。つまり、日本語の文法構造は、「文末決定論」という説に言われるが如く、述語は文の中心であって、主語は日本語の文構造にとっては必ずしも不可欠な成分ではなさそうである。

次に、発想とは何かということ、その問題をどう扱い、どう纏めるかということについての思いつきや、普段考えついたことを効果的な叙述、構成などによって表現することを指している。言語表現における発想とは表現主体の発話の心理、言語意識、社会心理（習慣と通念をも含む）などを指している。

中国人と日本人の言語発想や言語意識の違いについて考えてみると、中国語の場合は、言葉の構造（孤立語なので主語が文中に現れないと文脈がはっきりしないことなど）ともなんらかの関係があるはずであるが、中国人は基本的には言語が意思疎通の道具立てである以上、それを使って自分の意思を相手にはっきり伝えるのは当然のことではないか、と考えてきたし、実践してきた。だから、何かがあった時は、“你说说呀！你不说我怎么能知道呢？”（早く言いなさい！言わないと、分かりっこないじゃないか!?!）という言葉が決まり文句のように出てくる。いわば、アメリカ人ほどではないが、中国人は結構自分の思ったことをはっきりと言ってしまうほうである。

一方、日本人の場合はどうであろうか。日本では昔から「言わぬが花」という諺に形容される如く、普通の言語生活には言葉をあまり使わないで意思伝達を成し遂げようとする傾向が強く、「ことあげせぬ」国で「語らぬ」ことをよしとし、自分の方から相手に「わからせ、通す」ことはあまりしなかった。そこで、生まれたのが「勘」で分かり合うとか、「察し」や「気配り」などの非言語的発信行動による伝達の重要視であろうかと思われる。それゆえに、昔から日本では「沈黙の英雄」がほめたたえられ、今でも物をずばりと言ったり、あまり勢いのいい口調でしゃべったりするのはぶっきら棒に聞こえやすいことから言外表現に意思疎通を委ねるのがしばしばである。

これを説明するためには一つ例を挙げよう。日本人の日常会話には「どうも」という

言葉がよく使われる。言い換えれば、この「どうも」という言葉ぐらい便利な日本語はないかもしれない。朝、誰かに会ったとき、「おはよう」の代わりに「どうも」である。夕方別れるときにも「さようなら」の代わりにまた「どうも」。お礼をいう時も「先日はどうも」、結婚式へ行っても「どうも～」、葬式でも「どうも～」、どこへ行っても誰に会っても「どうも、どうも」ですませている日本人が多いようである。言わば、この「どうも」はいつでもどこでも誰に対しても使えそうな万能な言葉である。しかし、日本人にとっては誰でも分かるようなこの「どうも」という言葉を中国語に翻訳する時案外うまくできない場合がよくある。たとえば、日本人は友人に出会うとよく、「先日はどうも」と挨拶をするが、それをそのまま中国語の「前几天实在」と翻訳すると意味不明な言葉になってしまう。つまり、「先日はどうも」はそのあとに「すみません」とか「ありがとう」とか「失礼しました」とか「お世話になりました」とかの内容が省略された表現ではないかと思うが、この場合中国語で「前几天麻烦你了」「前几天谢谢你了」「前些日子多有打搅」「那一天实在对不起了」などとはっきり言い分けないと分からないのである。また、中国人は誰かのある行動に誘う時に、あるいは行動すべきだと急ぎたてる時は「我们立刻开始吧」「我们马上走吧」などと明瞭な表現を喜ぶが、日本人は同じ場合でも強制的に押付けがましく指示するのが失礼なことだと考え、「ぼつぼつ始めましょう」とか、「そろそろ出かけましょうか」などといったぼかし表現をする。

そういうことで、日本人はいままでかすかな表情や、控え目な身体の動き、目つきなどを言語行動と置き換えてお互いに意思伝達し合ってきたのである。こういった表現の形が成り立つのは「話さないでも分かる」というのが原則或いは前提となっているからである。そのため、日本人は積極的に自分の意図を相手に言おうとせず、自分の意見なり、主張なりをはっきり述べようとしない。と同時に他人の事情をも問おうとしないし、そういう消極的で、できる限り主動文を避けて表現するのをよしとしてきたわけである。

次に行為者意識のことであるが、中国人は出来事はある行為者によるものとしてとらえるのが普通である。しかし、日本人の場合は、出来事が誰によって起こったかということよりも出来事そのものに対する関心が先なので、同じ出来事に対する中国人と日本人のとらえ方は相当違っている。それで、中国人は、「他从小就失去了父母(彼は幼いころから両親を失った)」、「他让我等了一个小时(彼は私を一時間も待たせた)」、「在运动场举行了运动会(運動場で運動会を行った)」など、「～が～をする」というような、いわゆる「他動詞」的表現を好むが、日本では「自ら～する」という考え方は不適当に感ぜられることから、それよりは「～なる」とか「～される」とかというのが良しとされるのである。したがって、日本人はなるべく能動表現を避けた表現形式を好むが、受身

的に間接的に自然にそう「なる」という具合に表現するのが丁重だというわけである。上の中国語例文の日本語訳は直訳であるが、同じ意味を表すには日本人はむしろ次のような表現をするだろう。「彼は幼いころから両親に死なれた」、「彼に一時間も待たされた」、「運動場で運動会が行われた」。

このように、言語意識や社会通念、言語習慣による発想法の違いによって中国人と日本人は同じ意味を表すのにかなり違った表現法を使うのである。要するに、中国人は人間或いは動作主体が「～する」という「為手」の立場に立っての表現を好み、日本人は非人為的に、物事が自然に「そうなる」というような「受け手」か、第三者の立場に立っての表現を好むようである。

## 2. 自己抑制の日本語表現と自己本位の中国語表現

中国は、5千年もの歴史を持っている文明古国である。長い間に中国文化の主要な地位を占めている儒家思想は、昔から、日本文化や日本人の思想に大きな影響をもたらしたと言われる。儒家思想は謙虚を美徳としている。二千年あまり前の孔子がかつて「克己」(己れに克つ)を提唱した。自己抑制が深く日本人の身に染み付いた精神的な態度で、社会生活の分野にも表れている。

「世間、世間体、けじめ、礼儀、分際、身の程、遠慮」のような言葉はみな自己抑制をして、他人に気を使う場に用いられる言葉である。日本人は自分の社会における位置のことをよく気にし、他人の目を意識し、他人に気を使いすぎると言っている。結局は、左右上下の人たちの「ほめる、叱る」によって行為を律されることの多いということである。「控える」「さし控える」「控え目にする」のような振る舞いと言語表現が適当だと思われる。その反対、自己抑制を忘れた人々、いわゆる自分の身分にふさわしくないことをする人々は「ずうずうしいやつ」、「身の程も知らず」、「ばかばかしい」と非難される。

こういう自己抑制の精神は、日本人の言語意識や言語表現に貫かれていて、日本語表現の一つの特色とも言えるのではないかと思う。

「大変恐れ入りますが～」、「まことに恐縮ですが～」、「私事にわたって恐縮ですが～」、「僭越でございますが～させていただきます」のような言葉は日本人から挨拶などに愛用されている。これはたぶん本音ではないということを知っていながら、すわりのいい言葉として人々に認められている。それを使わないと「謙虚でないやつ」、「高慢なやつ」だと思われるのではないかという心理からだろう。日本人は事実を述べる時でさえ、こうして言葉の着物を着せてやらないと他人に失礼になるかもしれないのである。

もう一つ典型的な例は、日本語では確言、断定、断言をできるだけ避けるあいまいな表現が相当発達していることである。「～ではないでしょうか」、「～じゃないかと思えますけど」、「～とも言えそうな気がします」、「～と受け取りかねないんじゃないかと思えるのですが」、「～と言えなくもないんじゃないかというような気がします」、「～いいじゃありませんかと思えますが」など、日本人は口癖のようにこのような表現を多用するが、外国人から見れば、これらの表現はなんとはいきりしない言い方であろう。

他人にショックを与え、強い刺激などをさせるのはいけないという日本人の心理から、できるだけはっきり言い切るような表現を避けようと努力する。そこで「お茶でも飲もうか」、「三日ばかり東京にいました」、「今晩会議があるよう(らしい)です」ようなぼかし表現などが出てくるのである。これも明確なことを言うに強制された感じで、相手の注意をあまり引きたくないためである。こうした表現は話し手が控え目な態度で他人と付き合いおうとする時に使われる。

同じ儒教思想の薫陶を受けてきた中国人の言語表現は日本語と大体同じではないかと考えている人が多いかもしれないが、比べてみたら、かなり大きい違いが見られるのである。特に現代中国人の言語意識や言語心理がむしろ国際化しつつある時代的背景のもとで、伝統的儒教思想の影響から脱しつつあり、西洋的言語意識の自己本位や自己主張の精神に多少ながら色染められ始めているのではないかと思う。相手をいたわる心配りに根ざし、常に相手の立場を考えて言葉を選ぶ自己抑制の日本語表現と対して、中国語表現のほうは多くの場合、論理的であり、発話者の意図を包み隠すことなく率直に伝え、相手に分からせるために筋道立ててはっきり説明する。言わば常に自分の立場を中心にしており自己本位的な言語表現をするのである。

例えば、バスの中で席を譲られた時、或いは、落し物を拾ってもらった時、中国人は感謝の気持ちで「谢谢(ありがとう)」と言う。つまり自分が助かった、有り難いという心理が働く。日本人はこんな場合に「すみません」と言ってお礼をするのである。つまり、人に迷惑をかけたことから相手にすまないという心理が働くからである。お茶を出された時やプレゼントをもらった時などに、中国人は普通「谢谢！」と表現するが、日本人は「恐れ入ります」とか、「お土産まで頂いて申し訳ございません」とか表現する。中国ではデパートで買い物済むと客が店員に「谢谢」と言うが、日本では店員が客に「毎度ありがとうございます」と挨拶する。なぜこんな違いが出たかという、中国人から見れば、店員のサービスが行き届いたおかげで自分は気楽に買い物のできたので、助かったと考えて客が店員に礼を言う。日本人から見れば、お客が店の品物を買ってくれて店は商売になったので、有り難いと考えて店員がお客に礼を言う。つまり、同じ場

面にもかかわらず、異なった言語心理や発想によって、全く違った言語表現が生まれてくるわけである。

中国人は話の実質を重んじ、事実のありのままを言い、自己肯定の表現をする。例えば、人から「どうも、お世話になりました」と礼を言われた時、日本人は、「いいえ、何も致しませんでした」と返事をする。中国人は「不客气，这是我应该做的」と自己肯定の表現をする。これをそのまま日本語に直訳すると、「いいえ、当たり前のことをしただけです(やるべきことをやったにすぎません)」となり、それこそ大変なことになってしまっただろう。人にご馳走する時、「何もありませんが、どうぞたくさん召し上がってください」、人にプレゼントするとき、「つまらないものですが、どうぞお受け取りください」、人を家に呼ぶ時、「むさくるしいところですが、ぜひ一度おいでください」などと言う。要するに、日本人は社会の和を重んじ、話し手の意見や事実との関係を重視するより、話し手や聞き手の感情や人間関係を考え、相手を思いやり、相手を気楽な位置に置く心遣いで、表現は控え目で、へりくだった、自己否定の謙譲表現を好む。相手にとって不利益になること、相手に不快感を与えかねない場合はなるべく人との衝突を避け、聞き手の気持ちを悪くさせるような露骨な言葉を控え、どちらかと言えば、誤解の恐れがあっても、相手の気持ちを傷つけるよりはましだと考え、故意に焦点をぼかしてやわらかく表現するのである。

### 3. 言語表現の違いから見た中国人と日本人

次に具体的な例を挙げながら、言語表現に見られる中国人と日本人の違いをさらに見てみよう。

誰かとの間に誤解が生じた場合、中国人は、「我们开诚布公地谈谈 / 胸襟を開いて意見を交換する」とか、「我们摆事实讲道理，推心置腹地谈谈 / 事実を根拠として道理を説き、誠意をもって交わる」という理屈的な表現をするが、日本人は、論理をうるさがり、勘や察しによる表現をする場合が多い。「誠心誠意、理屈ぬきで話し合おう」とか、「裸になって話し合おうではないか」などと言う。つまり、日本社会は論理よりも人間対人間の調和、協調が優先する社会であるようだ。

何か意見を発表する時、中国人の場合は謙譲表現として、「我来抛砖引玉」、「我还没有考虑好，说的不一定对」と切り出すことがあるが、「我认为～」とか、「我说说我的看法～」などと言っても失礼にならない。日本人は尊大だと思われたくないし、そして相手に不快感を与えたくもないので、遠慮がちで遠回しの表現をよく使う。例えば、「差し出

がましいことではございますが、一言申し上げます」とか、「私は専門家ではないので、非常識な質問かもしれませんが～」とか、「このような席から僭越でございますが～」とか、「先輩の方を差し置いて、私のごとき若輩が先に申し上げますことは～」などの前置きの言葉を挟む場合が多い。

突然誰かを訪問しに行った場合、中国人は「我是专程来看你的 / わざわざお見舞いに来ました」と言っても失礼にならず、却って私はあなたのことを非常に気に留めており、今もわざわざ見舞いに来たのだと自分の真心込めた気持ちを表明するのであるが、日本人は、突然来たので、相手の都合が悪かったら、気にしないでほしいと相手の立場をまず考えて、「そこまで来たので寄ってみた」と言うのである。

道で友達や近所の人に出会うと、中国人は「你出门呀 / 你上哪儿?」「我去买点东西 / 我去上班」などと具体的に応答するが、日本人は、「どちらへよ」「ちょっとそこまでよ」「そうですか、じゃ失礼」と言って漠然と応答する。

中国人は自分の望むことや望まないことを思い切って言葉に表す。他人の意見に賛成する場合、中国人は、例えば、「我同意田中的意见」などと明確に意思表示をするが、日本人は、自信たっぷりに自己顕示欲を丸出しにするのを避けて完全無欠には程遠いが、不満ではない程度と言った謙虚な気持ちが働いて「一応」という表現をよく用いる。「あの、私は一応田中さんと同じです」などと言う。日本人は議論すると気まづくなると思って意見を述べることを控える。日本人の意識では、自他の間には対立がない。したがって強い自己主張も強い自己否定もない、個人の自己主張より全体の融和が大切だと考えるようだ。

中国人は、物事を率直に表現し、直接的断定的な表現形式を用いるが、日本人は、相手の気持ちを悪くさせるような硬い感じの表現を避け、相手に刺激を与える明快な断定表現をあまり喜ばないため、穏やかでやさしい言い回しで表現し、婉曲な表現形式を用いる場合が多い。例えば、物事を肯定する時、中国人は、「是 / そうです」とか、「对 / その通りです」と言う。日本人は、「そういうことです」とか、「そういうことになります」などと言う。「この道の先で右へ回ればいいんですか」と道を尋ねたら、「ええ、それでいいと思います」という返事が返ってくる。中国人は、「对」とはっきり教えてあげる。中国語で、「这两天特别冷 / この二、三日ことに寒いですね」と言うのを日本語では、「この二三日ことに寒いようですね」と言う。中国語で、「我去上海 / 上海へ行ってくる」と言うのを日本語では、「上海へ行ってこようかな」という。中国語で「我很忙, 明天不能来 / 忙しいので明日来られない」と言うのを日本語は、「忙しいので明日来られないかもしれない」と言う。中国語で、「今天休息 / 本日は閉店です」と言うのを日本語は、

「本日は閉店させていただきます」と言う。中国語で、「我在哪儿见过你 / どこかで会っている」と言うのを日本語は、「どこかで先生にお目にかかったことのある気がする」と言う。会議の終わりを告げるとき、中国人は「会议到此结束」と言うが、日本人は、「会議はこれで終わらせていただくことにいたします」と言う。相手を誘う時、中国語は「你也去吧」「你也去好吗」と言うが、日本語では、「～行きましょう」とか、否定表現の「～行きませんか」を使う。中国語の否定表現「你不去吗？」は却って語感が強く感じる。日本語の言葉のエチケットとして、断定の「だ」の替わりによく「～じゃないといえないこともない」、「～と考えざるを得ません」、「必ずしもそうとは言い切れないんじゃないですかね」、「～と言えませんか」、「～ではないかと思われる」などと表現する。

中国人は自分の言いたいことをはっきり切り出し、そうすることが望ましいことだとされ、態度はいたって鮮明である。他人の意見に反対する時、中国人は、「我不同意你的意见 / あなたの意見に同意しかねる」とか、「我反对你的意见 / あなたの意見に反対です」などとずばりと言う場合が多いが、日本人は、「おっしゃることはよくわかりますが～の場合もありますから」とか、「確かにそういう見方もできると思いますが、私の考えとしては～」とか、「お言葉を返すようですが～」とか、「別に反対を唱えるわけではありませんが～」とか、「おっしゃるとおりかと思いますが～」とか、「御説ごもっともとは思いますが～」などと前置きを入れて反論する。時には外見上の同調部分だけを述べて、本意の反対意見は言葉を吞んでばかりしたまま引き下がることも少なくない。

つまり、日本人の行動は一定の原則から出てくるのではなく、周囲の状況によって行動のやりかたが決まり、環境に順応する性格が強く、環境に対して主体がはっきりと対立するということを好まない。目の前の事態に対して賛否の判断を下すよりも、与えられた客観状況をそのままに肯定し、自分だけがその圏外に立って不利益を蒙ることを恐れる。そこで、他人の意見に反対したり、頼みを拒否したりするとき、真っ向から反対するのではなく、できるだけしりが残らないように、一応相手の顔を立つ姿勢を取り、さりげない前置きの話や回りくどい言葉を入れて遠まわしな表現をする。

人の頼みを断る時でも、中国人は、「很遗憾我没空 / 残念ですが、暇がありません」とか、「抱歉我办不到 / すみません、お断りします」、「我不买 / 買わない」などとはっきりと言うのが普通であるが、日本人は、「ご期待に添えなくて残念ですが～」とか、「折角のお招きですが、ちょっと都合があって～」とか、「甚だ申し上げにくいことですが、その件は～」とか、「申し訳ございませんが、この次にはなんとか致します」とか、「お手伝いできるといいんですが～」とか、「今度は遠慮させていただきます。この次にお願いま



す」などの前置きを入れて婉曲的に断る。

また、日本人は、その場逃れの言葉として、「善処します」とか、「考えておきます」とかいう言い方をよく使うが、このような表現は常に中国人を困らせている。

命令や禁止を表す場合、中国人は、例えば、「要买这本书 / 必须买这本书」、「不许摘花 / 花を折るべからず」、「禁止穿行 / 横断を禁ず」、「小孩不许在此玩耍 / 子供はここで遊んではいけない」、「禁止吸烟 / 禁煙」などと明確な表現をするが、日本人は、言葉があまり露骨で強いと相手に対する当たりが強すぎると考え、言いたいことをかすかに触れる程度の言葉遣いをする。例えば、「この本は買って置くほうがいいと思う」、「花を愛しましょう」、「木が泣いています、通路を歩きましょう」、「良い子はここで遊ばない」、「タバコはご遠慮ください」などのような言い方をする。

前前節でも触れたが、中日の文構造上の違いにも関係があり、それに日本人は誰でも知っている事をくどくどと繰り返して言うことを嫌い、もし言わなければならない時はできるだけ短く言うようにし、それが相手への敬意の表明だと考え、思い切った省略表現をする。言葉が省略されても、日本は同一民族、同一文化、同一言語の国であるから、共通の社会ルールがあり、発想が同じであり、「以心伝心」で察しがつくようである。例えば、「寒くなりましたね」とか、「風邪を引きました」とか、「今お帰りですか」などの主語なし文が多く、特に場面や脈絡に依存した省略表現が多い。レストランで注文をするとき日本語は、「僕はスパゲッティだ」、「私はカレーライス」と言う。中国は多民族の国であり、物事を詳細に説き明かさないと相手に分かってもらえない場合も多いし、文の構造特徴にもよるので、上述の日本語を中国語に直すと、「天气变冷了」、「我感冒了」、「你刚回来吗」、「我要吃意大利面条」、「我要吃咖喱饭」などのように、主語も述語もつきたいわゆる「完結な文」にしなければならない。

敬語は日本語表現の大きな特徴の一つである。外国人の日本語学習者にとってだけでなく、日本人にとっても敬語を上手に使いこなせるには決して簡単な事ではなさそうである。敬語は、閉じられた日本社会で発達してきた日本語表現の重要な一面として、対人関係に敏感で、相手によって言葉遣いを変える。話す人の立場や人柄により、また、男女の別によっても違って来る。つまり、具体的な場面や感情に即した表現をとる。そこで、同じ意味を表すのに何通りもの言い方がある場合は珍しくない。中国語はそんなに変わらない。表現はほとんどの場合は一通りで済む。例えば、中国語で「谢谢你的帮助」という表現を日本語に言い換えると、相手が同輩か目下であれば、「仕事を助けていただいて大変助かりました」というが、相手が上司か目上であれば、「仕事を助けていただいてお陰で順調に運びました」と使い分けなければならない。中国語の「你辛苦了」

も日本語に言い換えれば、相手によっては、「お疲れさま」「ご苦労さま」と言い分ける。

どの言語にしても、その言語表現には生活的、文化的背景と深い関わりのある複雑微妙なものが少なくない。それによって、その言葉の表現にほかの言語と違った独特なニュアンスをもたらす場合が多い。例えば日本語では「三々五々」、「四、五日」と言うが、中国語では、「三三两两」、「三、五天」と表現する。「彼らは三々五々打ち語りいつつ行った／他们三三两两说着走过去了」、「出張で東京へ四、五日行ってくる／我出差去东京三、五天」。また、来来往往（中）／行ったり来たり（日） 鸡犬不宁（中）／犬猿の仲（日） 姜是老的辣（中）／亀の甲より年の功（日） 班门弄斧／釈迦に説法（日） 半斤八両（中）／どんぐりの背比べ（日）などは全く違った表現である。そして、言葉の食い違いの背景には、物の考え方の行き違いも大いに左右される。「谁教你们数学／数学は誰に習っていますか」（普通は「誰があなたたちに数学を教えていますか」とはあまり言わないようである）。シャッターを押してくれと頼まれて、「我给你照，把照相机给我／取って上げるから、カメラを貸してごらん」と言って、中国語は「给／よこす」、日本語は「借／貸す」と表現する。中国語は「我要活」、日本語は「死にたくない」と表現する。中国語は「在中国人里他的日语讲得最好」、日本語は普通「中国人で彼ぐらい日本語の上手な人はいない」と言って否定表現を用いる。中国語は「昨天我睡得很晚，所以今天我起得很晚」、日本語は、「昨日は遅くまで起きていたので、今日は遅くまで寝ていた」と表現し、「起きる」と「寝る」が丁度逆になっている。

#### 4. 終わりに

以上、言語表現に見られる中日両国人の違いを見てきたが、とにかく異文化間の相互理解は大変難しい。歴史、伝統、文化、社会、生活や風習が違うし、国民性や民族性も異なっている中日両国間の相互理解を深めるためにはまずそれぞれの言葉をよりよく理解することである。中国語や日本語教育に携わっている我々の責任は、中国人学習者あるいは日本人学習者に中国語や日本語を真に理解できる力、中国語らしい中国語、あるいは日本語らしい日本語を使いこなせる能力を身につけさせることである。そのためには、言語表現としての中国語や日本語の基本能力を強化するほかに、中日両国の文化、思考パターン、行動様式を認識させ、中国人あるいは日本人の言語発想、言語心理、言葉の中に潜む心の動きをしっかりと掴ませることが大切だと思う。

要するに、言語表現はその背景にある文化の性格に大きく影響されるもので、文化や発想が違えば、言語表現も当然違うわけである。中国人に日本語を的確に掌握させるに

は、日本語を使う時、中国語の発想から離れ、日本語の考え方に切り替える必要があるのではないかと思う。当然その逆も同じことだと思う。例えば、同じ人間が違う言葉を喋るとき、違った身振りをすることをよく目にする。日本語で電話をかける時は頭をぺこぺこと下げるし、中国語でかける時は反り返って中国人のポーズを取る。つまり、ある言語を喋るということは、その言語によって物を考えるようにし、あるいはそういう考え方に少なくとも近づけるようにしなければならないことではないかと思う。そこで、言語教育の中にその背景にある文化の教育を織り込み、それへの認識を強める必要があると思う。

#### 参考文献

- |              |       |         |
|--------------|-------|---------|
| 『日本のことばとところ』 | 山下 秀雄 | 講談社学術文庫 |
| 『日本語』        | 金田一春彦 | 岩波書店    |
| 『日本語と日本人』    | 芳賀 纒  | 講談社     |
| 『日本人の表現心理』   | 芳賀 纒  | 中央公論社   |

---

#### 執筆者紹介：

- |      |   |
|------|---|
| 方 懋  | 人文学部交換教員（平成15年度）<br>（中国黒竜江大学東方語言文学院教授）          |
| 高 鹏飞 | 明星大学客員教授（平成15年度）<br>（中国ハルビン師範大学外国語学院日本語語言文学部教授） |

